

C-07-9

遷延性意識障害例におけるペーサーゲイトトレーナーの使用経験

¹ 広南病院東北療護センター, ² MOVE インターナショナル, ³ 東北大学大学院医学系研究科肢体不自由学分野

○阿部浩明¹, 長嶺義秀¹, 中里信和¹, 藤原悟¹, 白崎淳子², 出江紳一³

【目的】遷延性意識障害を呈した症例では四肢の麻痺は軽度でも自発性の低下により、起居動作に多大な介助が必要な場合がある。このような症例に対するリハビリテーション(以下リハ)は残存する運動機能を維持しつつ意識障害回復への促しを続ける事が重要となる。しかし、運動機能維持のために十分な運動量を提供する事は時間的・人的制約から難渋する事が多い。我々は歩行器ペーサーゲイトトレーナー(以下 GT)を使用し、長時間の立位・歩行練習が可能となった意識障害症例への使用経験について報告する。【機器紹介】GTの特徴は股パッド、体幹パッド前腕パッドにより体重を支持でき使用者が脱力しても転倒を防止できる点である。一度設定すれば人的介助で立位姿勢を保持したときと同様に立位姿勢がとれ、自発歩行を妨げない。【症例紹介】頭部外傷後遷延性意識障害患者、34歳、男性、急性期治療、音楽運動療法、リハ等を施行し、受傷から約6ヶ月後に当院入院。意識障害に関する広南スコア(最重症70点)は65点であった。従命が困難であり精査困難であるが、四肢の随意運動は吸引の際にチューブを両手で的確に捉えることや腹臥位から自発的に背臥位へ戻ろうとする動作等により観察され、その際の分離運動の程度は良好で四肢のBrunnstrom stageは概ねV~VI程度と推察された。入院から9カ月後よりGTによる歩行・立位保持練習を開始し週5回、一日40分程度の立位・歩行練習が施行できた。入院1年後の広南スコアは47点に改善した。【考察】GTは長時間にわたる介助を必要とする遷延性意識障害症例に使用することで有効な活動量を提供できると考えられた。